

博士論文審査報告書

氏 名	近藤 和也
学位の種類	博士（心理学）
学位記番号	院博甲第31号
授与機関	東京成徳大学
学位授与年月日	2025 年 3 月 19 日
学位授与条件	学位規則第 5 条第 1 項
学位論文題目	予備校生の先延ばし行動に関する研究 —学習課題先延ばし行動尺度の作成と先延ばしの認知—

1. 論文概要：（1）目的、（2）方法、（3）結果及び考察

（1）博士論文の目的

博士論文の目的は、①予備校生の課題先延ばし行動の実態と特徴を明らかにし、先延ばし行動を定量的に測定できる尺度を開発する、②課題先延ばしに関わる認知と課題先延ばし行動の関係を明らかにする、③課題先延ばし後の情緒とその後の対応力の関係を明らかにし、対応力の鍵となる能力を明らかにすることの3点であった。

（2）研究1

研究1の目的は、「予備校生版課題先延ばし行動尺度」を作成し、その信頼性及び妥当性を検討することであった。2020年7月予備校生295名（男性207名、女性86名、無回答2名、平均年齢18.4歳）を対象として作成した「暫定版予備校生課題先延ばし行動尺度」を用いて、2021年7月560名（男性379名、女性170名、無回答11名、平均年齢18.5歳）の予備校生を対象として、質問紙による調査を行った。主な結果と考察として、因子分析の結果、第1因子「随意的課題の遅延」6項目、第2因子「時限的必須的課題の遅延」5項目からなる、「予備校生課題先延ばし行動尺度」が抽出され、信頼性と妥当性が確認された。本尺度によって、予備校生の課題の先延ばしを測定することが可能となった。

（3）研究2

研究2の目的は、予備校生の課題先延ばし行動と完全主義の関係を明らかにすることであった。方法として、2021年11月、東北地方の予備生計450名（男性292名、女性158名、無回答0名、平均年齢18.9歳）を対象に、予備校生版学習課題先延ばし行動尺度（PBS-P）と、完全主義の認知を多次元で測定する尺度（MPCI）

（小堀・丹野、2004）による質問紙調査を実施した。主な結果と考察としては、予備校生の先延ばし行動の頻度と完全主義には相関が見られなかったが、完全主義の

一側面である「失敗恐怖」の部分（MPCIにおける「ミスへのとらわれ（CM）」）について、高群低群に分けて t 検定をした結果、高群が「予備校生版学習課題先延ばし行動尺度」の一部の項目において有意に高い得点を示し、失敗する可能性の現実化を防ごうとする行動傾向の存在が示唆された。

（4）研究 3

研究 3 の目的は、予備校生における先延ばし行動に対する深刻度の評価と完全主義の相関を明らかにすることであった。方法として、2022 年 11 月、東北地方の予備校生 358 名（男性 233 名、女性 118 名、無回答 7 名、平均年齢 18.8 歳）を対象に、PBS-P の各項目に、「その行動は、あなたにとってどの程度深刻な問題と感じますか」という問いを追加したものと、完全主義の認知を多次元で測定する尺度

（MPCI）（小堀・丹野、2004）を使用して、質問紙調査を行った。主な結果として、深刻度と完全主義では、随意的課題の遅延深刻度課題の深刻度と CM との間に相関が見られた。そしてミスへのとらわれ（CM）を説明変数、先延ばし行動の深刻度を目的変数とした重回帰分析を行った結果、随意的課題の遅延深刻度と時限的必須的課題の深刻度の双方を有意に予測していた。

（5）研究 4

研究 4 の目的は、予備校生の学習課題先延ばし行動の頻度・深刻度と、完全主義及び自己調整力の関連、先延ばし中の気分とその後の行動を明らかにすることであった。方法として、2023 年 11 月、東北地方の予備校生 234 名（男性 173 名、女性 58 名、無回答 3 名）を対象に、研究 3 と同様の質問紙に加え、自己調整学習方略尺度（藤田、2010）と、先延ばし中の気分およびその後の行動について問う質問紙を使用して調査を行った。主な結果と考察として、①先延ばしの深刻度と先延ばし中の気分「不安」「落ち込み」「いらだち」には正の相関があること、②完全性追求

（PP）とミスへのとらわれ（CM）は「不安」「落ち込み」「いらだち」に直接的に影響を及ぼすとともに、先延ばしの深刻度がアウトカムを増幅する可能性があること、③先延ばし後の行動再開には、完全主義の PP や自己調整学習方略の「認知的方略」「モニタリング方略」が影響している可能性があることなどがわかった。

（6）総合考察

「予備校生版課題先延ばし行動尺度」開発の意義、予備校生の「受験の失敗という傷を負いつつも自身の希望する大学・学部を目指すという意欲を持ち合わせている」という特質を踏まえた介入の視点等について論じた。

2. 評 価：

予備校生の先延ばし行動に関して、尺度の開発、先延ばし行動の頻度・深刻度と完全主義や自己調整力の関係、さらに先延ばし中の気分とその後について、ステップを踏んで 5 回の調査研究を行った。予備校生の心理教育に示唆を与える、先延ばし行動の心理に関する先駆的な研究である。統計的分析において改善すべき点はあるが、博士論文として十分に条件を満たしていると評価できる。

3. 最終試験結果：

2025 年 2 月 5 日、公開において、論文提出者より報告を受け、質疑応答が行われた。その結果、最終試験に合格と判断された。

4. 結 論：

論文審査と最終試験結果の評価に基づいて、本論文は博士の学位に値すると判断された。

2025 年 2 月 17 日

	〈 所 属 ・ 職 名 〉	〈 確 認 者 氏 名 〉
主 査	東京成徳大学大学院 心理学研究科臨床心理学専攻 教授	一谷 幸男
副 査	東京成徳大学大学院 心理学研究科臨床心理学専攻 特任教授	石隈 利紀
副 査	東京成徳大学大学院 心理学研究科臨床心理学専攻 教授	井上 忠典
副 査	東京成徳大学大学院 心理学研究科臨床心理学専攻 准教授	菊池 春樹